

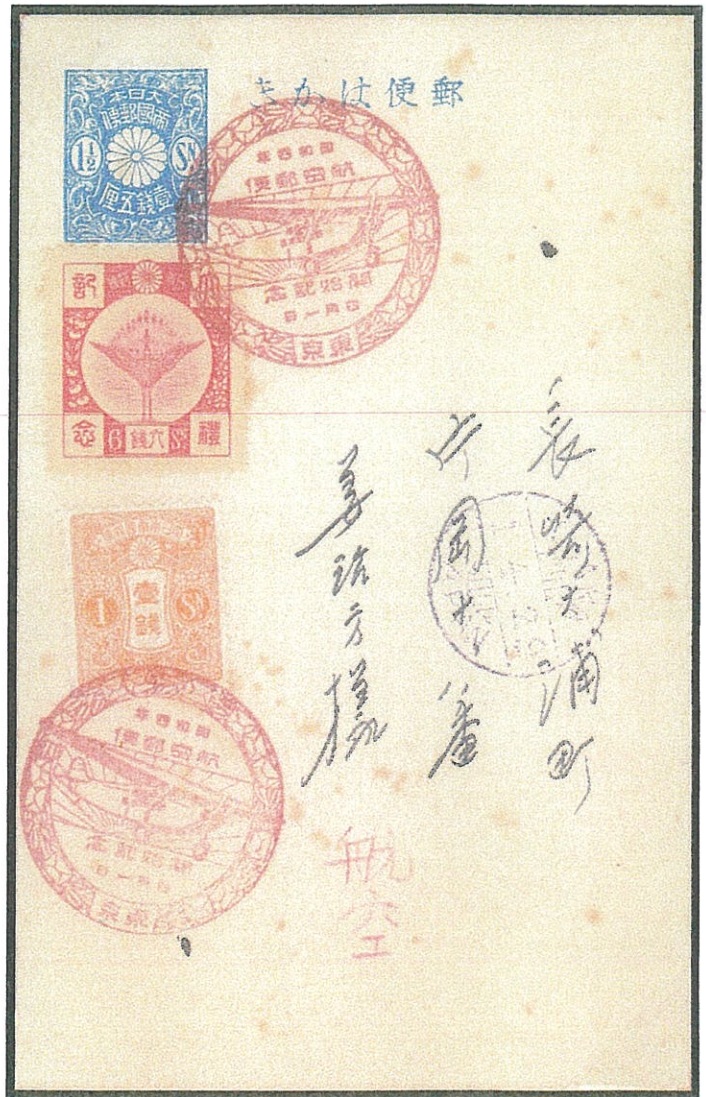
国内航空郵便開始記念実遞はがき

蜂谷紀之

昨年の支部報「くまもと」384号では、1919年(大正8年)10月4日に発行された「飛行郵便試験」記念の加刷切手を貼り、記念印を押したマキシマムカードを紹介しました。記事に書いたように、予定されていた航空郵便の試験飛行は雨天のために延期され、実際に実施されたのは、当初予定の18日後になりました。

飛行機は第一次世界大戦(1914-18)で軍用機として発達しました。試験飛行実施の背景には、軍事的意義があったことが窺えますが、民用開始までは時間がかかりました。さらなる試験飛行や航空会社の設立などを経て、郵便制度としての「航空郵便」の取り扱いが始まったのは10年後でした。

右図はこの「航空郵便開始」初日の1929年(昭和4年)4月1日付の記念特印が押印された実遞はがきです。差立て局は東京、宛先は長崎で、途中の大阪まで航空郵便で運ばれ、同日のOOSAKA局の中継印が押されています。



国内用1銭5厘分銅はがきに、航空料金として、前年発行の昭和大礼記念6銭切手と、田沢新大正毛紙1銭切手合わせて7銭分が貼付されています。

なお、最初の芦ノ湖航空8銭5厘切手が発行されるのは半年後の同年10月6日です。

日本とペルーの切手に描かれた題材を調べる 蜂谷紀之

日本とペルーは、両国の修好 150 年を記念する切手を発行しました。このうちペルー切手は 2023 年 11 月 2 日、両国の世界遺産を描く連刷切手(図1)です。うち 1 枚はペルーの「マチュ・ピチュ」、もう1枚は日本の「那智大滝と青岸渡寺三重塔」を描いています。



図1 ペルー「日本との修好150年」二種連刷

一方の日本切手は、2023年8月21日に、世界遺産遺跡、秘境などの観光地や民族衣装・料理など、ペルーを題材にした84円切手10種シートでした。このうち4種を図2～5に紹介します。ペルー(図1)と共通の題材は「マチュ・ピチュ」(図2)です。日本切手にマチュ・ピチュが登場するのは、1999年の「ペルー移民100年」記念と、2013年の海外の世界遺産に続いて3回目です。マチュ・ピチュはインカ帝国(15世紀半ばから16世紀前半)の要塞都市で、人気のある観光地です。



図3 ナスカの地上絵

図2 マチュ・ピチュ



図4 チャンチャン遺跡 図5 インティライミ

「ナスカの地上絵」(図3)も有名な世界文化遺産で、紀元前2世紀から後6世紀頃のもので、これに関連して、ペルーが1999年に発行したナスカ地上絵の小型シート(図6)を紹介します。日本切手はハチドリ、ペルー切手はコンドルです。ペルーのシート地には地上絵の研究者マリア・ライヘが描かれています。

図4に描かれたのは、15世紀にインカによって滅ぼされたチムー王国の都「チャンチャン遺跡」です。ペルーが2006年に発行した観光切手から、同遺跡の切手(図7)もご覧ください。

図5と図8の切手に描かれる「インティライミ」とは、インカの最高神太陽神を祀り、豊穰を祈願するもので南米三大祭りの一つです。



図6 インカの地上絵(ペルー, 1999)

ペルーがスペインに支配されてからはキリスト教会との関係で禁止されていましたが、1967年に復活しました。太陽の神殿で民族衣装を身にまとった人々が歌い踊り、リヤマの心臓を捧げる儀式なども行われます。図8の2018年発行のペルー切手は、祭りの復活50年を記念したものです。

図1のペルー切手の図案に採用された「那智大滝と青岸渡寺三重塔」は、2006年発行の第三次世界遺産シリーズ第一集「紀伊山地の霊場と参詣道」シートに描かれています。このうち図9は那智大滝の切手を、図10はそのシート地で、大滝とともにこの三重塔が描かれています。



上：図7 チャンチャン遺跡
右：図8 インティライミ50年



図9 那智大滝



図10 第三次世界遺産第一集「紀伊山地の霊場と参詣道」シートの一部